



2015年7月31日

特定非営利活動法人 風の家  
〒730-0843 広島市中区舟入本町 17-8  
082-232-6696  
buratto-hiroshima@wine.ocn.ne.jp  
<http://kazenoie.jp/>



郵政の年賀寄附を得て、OBが来所して時間を過ごす居場所にするために本部建物の1F駐車スペースを改修して7月の初めより稼働させることができました。これまで、狭いアパートの一室に十数名がひしめき合っ内職作業などを行っていましたが、今は皆ゆったりとした気分であいあいと1日の何時間かを過ごして帰ります。

居場所というのは風の家存在の大きな目的として開所当初から重要視してきましたが、やっと環境的な課

題を何とか解消できたのかなとほっとしています。OBのみんなは、時々袖触れ合い過ぎてトラブルもありましたが、よくあんな狭い場所で文句も言わずに頑張ってきてくれました。

でもほっとばかりしてられません、この居場所に集まる皆とはどうしても折り合うことができないで社会の中で孤立しがちになるOBも少なからず居るからです。今後の課題は、そのための対応方法と考えています。運営の安定化を図ることも勿論ですが。

(8月のとても暑い日に 理事長 嘉戸 篤)

## 近況報告

風の家は今年度より、広島市の「暮らしサポート」事業に参加しています。これは生活に困って生活保護受給の相談に訪れた生活困窮者へのシェルター提供を行なう事業です。市内3ヶ所あるシェルターのうち1つです。4月以降、犯歴の有無に関わらず月に6名ほどの利用があります。もちろんこれまで行なってきた補導委託、自立準備ホームも継続しており、特に少年たちには若いエネルギーに振り回されながらその立ち直りを見守っています。さらに、今年度は、日本郵便の年賀基金によって、作業所をこれまでのアパートの一室から「ぶらっと広島」のI階部分へ移すことができました。新たな広い空間で、新しい出発を果たしています。一度見学にいらしてください。

現在、風の家にはほぼ定員いっぱいの宿所利用者がいて、少年が1人、高齢者が2人、そのうち障害者が2人となっています。

1. 最近の大きな話題といえば、神戸連続殺傷事件の加害者が手記を発表したことがあります。遺族に了解を得ていなかったために大きな批判が寄せられましたが、本人は自分が生きるために本を書いたのだと言っています。どちらの立場に立つにしろ、もしも私たちが支援している人がこのような本を書きたいと言ったら、もしも実際にこのような本を書いたとしたら、私たちはどうしたら良いのかを考えると答えが見つかりません。2. 去る7月1日、法務省の「立ち直りフォーラム」で薬物依存からの回復途上にあることを講演した元芸能人が、性犯罪で書類送検されたという報道がありました。薬物への依存から性的発散への依存に変わったのでしょうか。苦しみからの逃避があったのでしょうか。3. 立ち直ることは苦しみです。犯罪によって回避していた心の痛みを、自ら引き受けることが立ち直るということだからです。でも、それはどうやって可能になるのでしょうか。支援者に突きつけられる問題の大きさを思われます。

利用者  
の  
声

訳あってこの施設で暮らすことになり感じたことは、人間関係を円満に行う礼儀や挨拶の重要性や自分と他人の距離感。悩みや不安を抱えても、相談に乗ってくださる理事や職員がいて、解決や答えに自分でたどり着けるように誘導してくれました。人によって滞在期間は違いますが、努力や精進しようと皆頑張っていて、刺激になり、切磋琢磨しています。(M)



ボラン  
ティア  
から

風の家が宿所の提供を始めたころから、ボランティアとして参加してきました。夜という時間には、昼間とはまた違う、様々なことが起こってきます。利用者の姿に戸惑うこともあれば、自分の無力さを思い知ることもあります。それでも私は彼らとともに過ごす夜を大事にしていきたいと思うのです。夜に人が過ごす場所は家なのです。その家を支える柱の一つであることが自分の役目なのだと思います。(H)

お知らせ

作業所の改修が行われ、新しく広い作業場を確保することができました(右の写真)。現在、外部からの紹介で通っている人が半数近くになっています。風の家では引き続き、これまでの生活状況のために引き受けの難しい作業所利用者の紹介を受け付けていますので、近くにお困りの方がいらっしゃれば、声をおかけください。

職員より

風の家では現在、保護観察所、刑務所、家庭裁判所などの法的機関、福祉、地域と連携し、利用者が増えつつあります。いろいろなはざまで、支援が受けられなかった利用者の再犯防止、安定した社会生活につながるよう、処遇する方もされる方も日々大変ですが、風の家ならではの色でがんばっていきたいと思います。(D)



編集後記

1年に2回の発行を目指しながら、毎日の業務に追われて、1年に1回のペースになっているニュースレターですが、何とか無事に発行することができました。1年の間に施設の新しい展開もあり、他方、これまで働いてくれた職員が新しい場所での活動を求めて旅立っていくということもありました。いろいろな出来事に揺らされる日々ですが、皆様の支援をいただいて、また1年頑張っていこうと想います。(K)